

## 【作成した目的】

- この洪水避難地図は、住民の皆さんのお住まいの地域が霞ヶ浦や桜川のはん濫などにより浸水し、または浸水するおそれがある場合に、**安全に避難**していただくために作成したものです。
- 基本となる図は、利根川水系霞ヶ浦浸水想定区域図（作成：国土交通省関東地方整備局霞ヶ浦河川事務所、平成17年7月7日公表）と利根川水系桜川浸水想定区域図（作成：茨城県、平成18年3月30日公表）で、それぞれ想定される浸水区域とその深さ（浸水深）を5段階に色分けしています。この結果を基に、洪水時に避難が可能な**避難所等**を地図上に示しています。
- この地図には、避難所以外に、**避難時の心得、携行品リスト**などの多くの情報を掲載していますので、ご自身、ご家族の被害の軽減にお役立てください。

## 【作成条件等】

- 霞ヶ浦は概ね100年に1回程度起こる大雨が降って、霞ヶ浦・北浦・鰐川・常陸利根川がはん濫した場合の浸水状況を想定しています。（利根川水系霞ヶ浦浸水想定区域図）  
前提となる降雨：霞ヶ浦流域に8日間総雨量で600mmの降雨（昭和13年6～7月実績降雨）
- 桜川は概ね30年に1回程度起こる大雨が降って、桜川がはん濫した場合の浸水状況を想定しています。（利根川水系桜川浸水想定区域図）  
前提となる降雨：桜川流域に48時間総雨量で246mm、ピーク時の1時間に51mmの降雨
- 霞ヶ浦、桜川のはん濫計算は、はん濫地域を格子状（約50m×50m）に分割して、その平均地盤高を基に計算しています。
- 2つの浸水想定区域図において、同位置の浸水深を比較し大きいほうを当該地点の浸水深として表示しています。

## 【使用上の注意点】

- 短時間の激しい雨や長期間にわたる大雨などの雨の降り方によって、また、堤防の決壊を想定していない小さな河川などのはん濫により、表示以上の深さになったり、**浸水が想定されていない地域でも浸水が起こる可能性がありますので注意**してください。
- この洪水避難地図は、複数の計算パターンから得られた浸水範囲を同時に表示していますが、実際には、**堤防が決壊する場所によって想定される浸水区域や浸水深は異なります。**

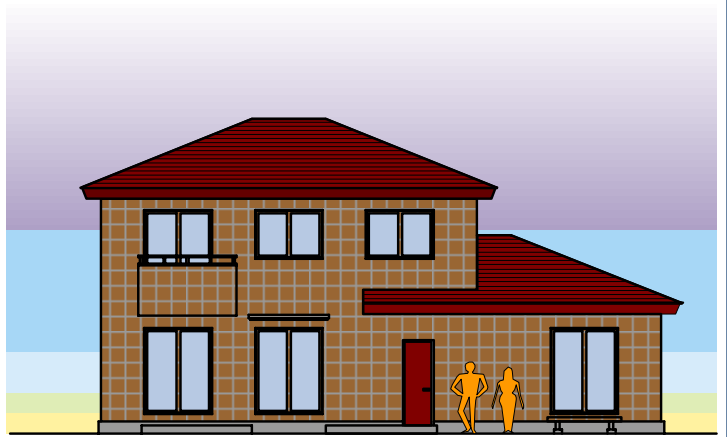
# 洪水避難地図の使い方

## ● 洪水避難地図で自分の家を確認してください。

洪水避難地図には、洪水時に想定される浸水の目安を下図のとおり色別に表示しています。自分の家を探してどの程度浸水するかを確認してください。

### 浸水の目安

3階以上が浸水。場所によって家が破壊され、流失する恐れがある。	5.0m以上
2階の軒下までつかる程度。場合によっては、家が破壊され、流失する恐れがある。	2.0~5.0m未満
1階の軒下までつかる程度。	1.0~2.0m未満
大人の腰までつかる程度。床上浸水の発生。	0.5~1.0m未満
大人のひざまでつかる程度。床下浸水の発生。	0.0~0.5m未満



## ● 避難所を確認してください。

自分の家が該当する避難対象地区と避難所を確認してください。

## ● 避難経路を歩いてみましょう。

家族のみなんで避難所まで歩いてみましょう。実際に歩いてみて、安全で避難のしやすい経路を探してみましょう。

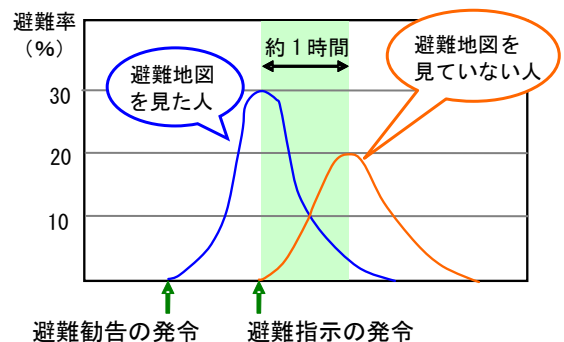
## 早めの避難があなたの命を救います。

桜川の堤防が決壊した場合には、はん濫水の勢いで堤防近傍の家屋は破壊されたり流失したりする可能性があります。

そのようなときに避難せずに家屋にとどまっていた場合には、人命に係わる事態の発生も想定されます。

洪水時には市からの避難情報等にも注意しながら、堤防が決壊する前には必ず避難が完了するよう早めの避難を心掛けてください。

洪水避難地図を作成していた福島県郡山市の事例では、洪水避難地図を見ていた人の避難開始時期が見ていなかった人に比べて、1時間ほど早まるという効果が認められました。また、実際に避難をした人の割合は、見ていた人の方が10%ほど多いこともわかっています。(右図)



出典:「平成10年8月末集中豪雨における郡山市民の対応行動に関する調査報告書」、群馬大学工学部 片田研究室